

神應寺

神應寺は男山の北東側にあり、石清水八幡宮より谷を隔てて建っています。寺院の境内には春に咲く「シャガ」が群生しており、また澤山のもみじがあり、春には青もみじ、秋には色鮮やかな黄色や紅に染まり、参拝者たちを楽しませています。

神應寺は行教律師が石清水八幡宮を建立してから間もなく、860 年に行教によって創建されたとされています。神應寺は元々、石清水八幡宮で八幡神として神格化された日本の伝説的な第 15 代天皇である、應神天皇の霊を祀る御牌所として建てられました。この寺院は長い歴史の中で何度か宗派を変えましたが、室町時代（1336～1573）に曹洞宗の寺院になりました。第 12 代住職の代に、神應寺は、豊臣秀吉（1537～1598）、徳川家康（1543～1616）などの権力者たちから崇拝されました。そして家康の後の徳川将軍たちもまた同様にそれに続きました。

この寺院の本堂には、本尊である医学と治療の仏様である薬師如来像があります。また、豊臣秀吉の息子の秀頼（1593～1615）からの寄進と思われる衣冠束帯の豊臣秀吉像や、平安時代（794～1185）初期に作られた創建者である行教律師の座像もあります。行教像は元々、神道と仏教を融合して信仰していた神仏習合の場であった頃の石清水八幡宮に安置されていました。1868 年の政府の命による神仏分離の後、神應寺に移されました。現在では国指定重要文化財に指定されています。

神應寺の奥の谷には奥の院と称される数棟のお堂があり、仏教の明王である不動明王が祀られているお堂、慈悲の菩薩である十一面観音が祀られているお堂、そして生命のある全てのものの救世主である地蔵菩薩が祀られているお堂があります。また、「ひきめの滝」で滝行を行うために奥の院を訪れる参拝者もいます。

神應寺の谷の部分を含む境内は一般公開されていますが、本堂に入るにはこの寺院への予約が必要です。お問い合わせは日本語のみでの受付となりますので、ご注意ください。